

# 埼玉県における幼稚園教育 I

(明治期の幼稚園)

立 川 多 恵 子\*

(受理57年5月18日)

## I 許置の概要

埼玉県における幼稚園教育は、浦和の県立師範学校付属小学校に幼稚保育科を付設したことをもってはじまる。

明治17年のことである。その4、5年後、熊谷、浦和、所沢、本庄の各地の町村立小学校に4つの公立幼稚園が設置された。

しかしその師範幼稚保育科も、創設されて10年後には廃園になっている。他の公立幼稚園の場合も短いもの

は、2、3年で廃園になっているが、長いものは、20年余も継続した。

一方私立幼稚園の場合は、最初のものは、明治20年代に創設されていたと考えられるが、はっきりしない。

現存する幼稚園でもっとも古いものは、明治34年に川越に創設された宇気良幼稚園（後で初雁幼稚園と改名）をはじめ、川越幼稚園、熊谷幼稚園である。

次に明治期における幼稚園の設置状況を文部年報によって表にまとめてみると、次のようになる。

幼稚園年次別一覧表

(第1表)

	園 数			保 母 数			幼 児 数					
							公 立			私 立		
	公 立	私 立	計	公 立	私 立	計	男	女	計	男	女	計
明 治 19 年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20 年	1	—	1	—	—	—	28	33	61	—	—	—
21 年	1	—	1	—	—	—	25	29	54	—	—	—
22 年	5	1	6	1	—	1	163		—	101		—
23 年	5	1	6	1	—	1	—	—	—	—	—	—
24 年	5	—	5	—	—	—	87	73	160	17	17	34
25 年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26 年	2	—	2	3	—	3	46	39	85	—	—	—
27 年	3	—	3	4	—	4	84	75	159	—	—	—
28 年	3	—	3	3	—	3	74	64	138	—	—	—
29 年	2	—	2	2	—	2	56	51	107	—	—	—
30 年	2	—	2	2	—	2	45	46	91	—	—	—
31 年	1	—	1	1	—	1	29	26	55	—	—	—
32 年	1	—	1	2	—	2	40	33	73	—	—	—
33 年	1	—	1	1	—	1	23	32	55	—	—	—
34 年	1	—	1	2	—	2	37	46	83	—	—	—
35 年	1	1	2	2	1	3	34	38	72	12	8	20
36 年	1	2	3	2	3	5	30	37	67	31	29	60
37 年	1	2	3	2	3	5	21	26	47	32	28	60
38 年	1	2	3	2	4	6	26	25	51	76	64	140
39 年	1	2	3	2	4	6	22	20	42	66	62	128
40 年	1	2	3	1	4	5	22	17	39	76	87	163
41 年	—	2	2	1	7	8	23	20	43	53	58	111
42 年	—	3	3	—	5	5	—	—	—	92	93	185
43 年	—	3	3	—	6	6	—	—	—	99	90	189
44 年	—	2	2	—	5	5	—	—	—	48	60	108

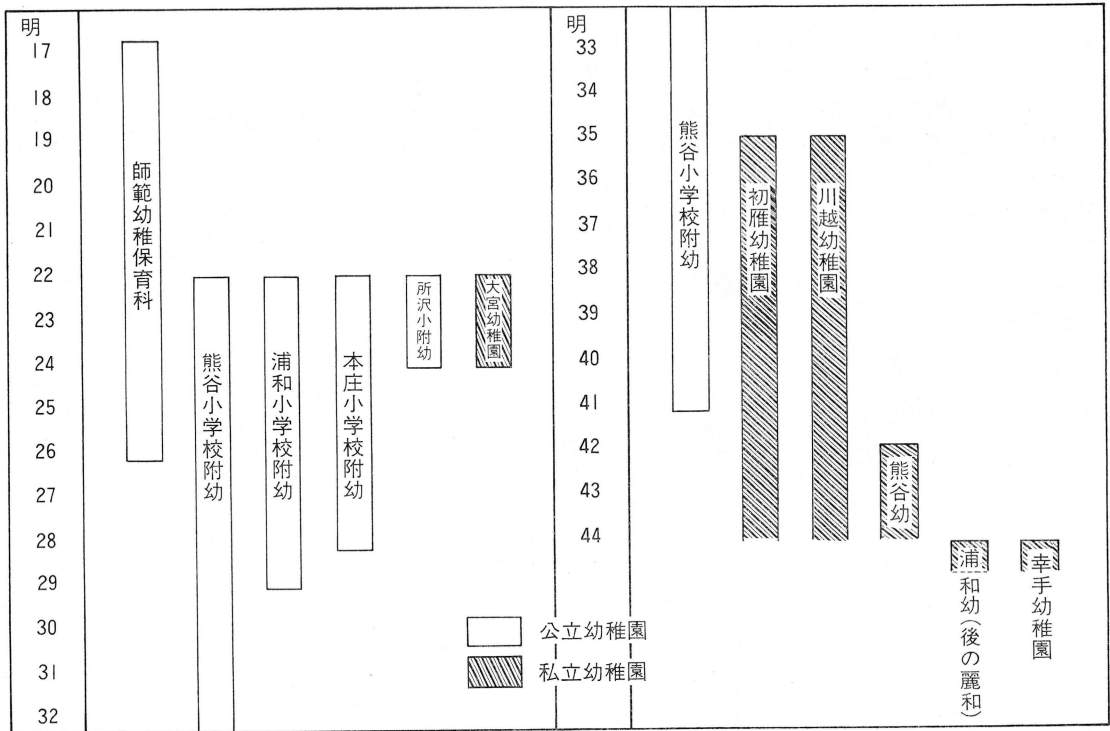
(文部年報による)

\* 幼児教育研究室

(第2表)

年 代	数	幼 稚 園 名	確 認 資 料	備 考 欄
明治20年	1	師範幼稚保育科	明17年創設（県行政文書1862号による）	
21年	1	同 上		
22年	6	1. 師範幼稚保育科 2. 熊谷小学校付属幼稚園 3. 浦和小学校付属幼稚園 4. 所沢小学校付属幼稚園 5. 本庄小学校付属幼稚園 6. 大宮幼稚園	（埼玉教育雑誌第58号明21年7月発行による） 知事巡視功程表による。 （県行政文書明986の1号による）	
23年	6	同 上	（県行政文書明1077）によって推定	
24年	5	同 上		
25年				記載もれ
26年	2	1. 熊谷小学校付属幼稚園 2. 浦和小学校付属幼稚園	この年正式に開申文書（県行政文書1907号）が文部省に提出される。	師範幼稚保育科廃園となる。（県行政文書明1888号）
27年	3	1. 熊谷小学校付属幼稚園 2. 浦和小学校付属幼稚園 3. 本庄小学校付属幼稚園	この年正式に開申文書（県行政文書明1909号）が文部省に提出される。	
28年	3	同 上		
29年	2	1. 熊谷小学校付属幼稚園 2. 浦和小学校付属幼稚園		本庄小学校付幼明28年末廃園（埼玉統計書による）
30年	2	同 上		浦和小付幼明30年末廃園（埼玉県統計書による）
31年	1	熊谷小学校付属幼稚園		
32年	1	同 上		
33年	1	同 上		
34年	1	同 上		
35年	2	1. 熊谷小学校付属幼稚園 2. 字気良幼稚園	初雁幼稚園沿革史より	後の初雁幼稚園
36年	3	1. 熊谷小学校付幼稚園 2. 初雁幼稚園 3. 川越幼稚園	川越幼稚園沿革史より	
37年	3	同 上		
38年		同 上		
39年		同 上		
40年		同 上		
41年		熊谷小学校付幼稚園 1. 私立初雁幼稚園 2. 私立川越幼稚園		熊谷幼稚園廃園（埼玉県統計書による）。
42年	3	1. 私立初雁幼稚園 2. 私立川越幼稚園 3. 私立熊ヶ谷幼稚園	熊谷幼稚園沿革史による	
43年	3	同 上		
44年	2			初雁，川越，熊谷3園のいずれか1園が報告もれ，この年幸手幼設立。しかし実数には入っていない。

(第1図) 明治期における埼玉県幼稚園設置図



第1表(文部年報による)の数値を第2表で具体化することによって、埼玉県における明治期の幼稚園設置状況を知ることができる。

さらに、埼玉県における明治期の幼稚園設置状況の推移を図示すると第1図のようになる。

これらの図から次のようなことが考察される。

- ① 埼玉県では明治17年に、県立の師範学校に、幼稚保育科が創設され、幼稚園教育が始められた。そのことは県行政文書(1862)に明記されているが、その年の文部年報には記載されていない、報告もれと考えられる。
- ② 明治22年になって、熊谷、浦和、所沢、本庄の各地の小学校に、それぞれ付属幼稚園が創設される。これは県行政文書、及び埼玉教育雑誌によって確認することができる。(第2表参照)
- ③ 埼玉県における最初の私立幼稚園は、公立幼稚園の創設と前後して、山深い秩父に創設されたと推測される。(\*県行政文書明1077) 大宮幼稚園である。

現在のところ、設置期、廃園期については、明確に

\* (県行政文書1077)

私立大宮幼稚園ニ交付セル勅語謄本処分の件。

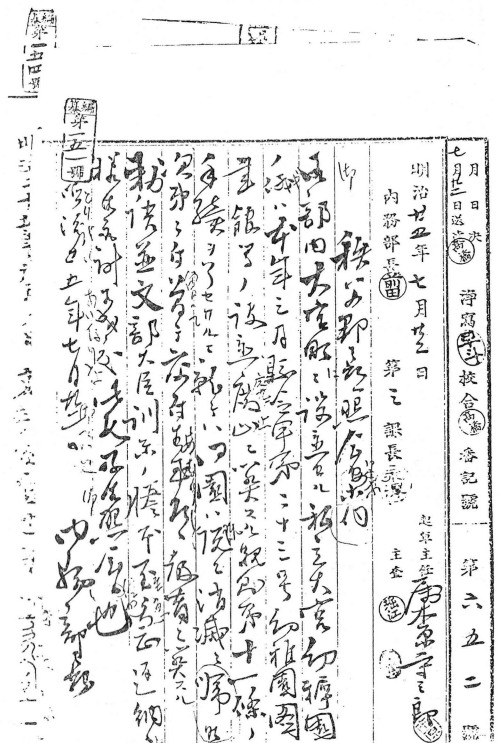


写真1

とらえることはできない。(埼玉県教育史 第4巻 P 160) 当時秩父市は、大宮郷といわれていた。

- ③ 5つの公立幼稚園のうち、所沢幼稚園は、設立2、3年で廃園になったと考えられる(埼玉県年報より推測)、明治26年には、師範幼稚保育科が廃園になった。

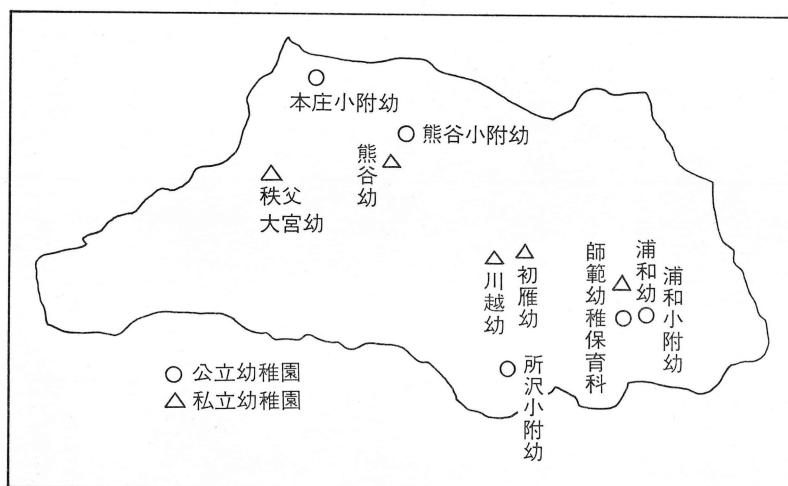
浦和、熊谷、本庄の公立幼稚園は、その後しばらく存続していたが、明治28年になって、まず本庄小附属幼稚園が廃園になり、明治30年には浦和小附属幼稚園が廃園になる。

- ④ 最後まで存続していた熊谷小付属幼稚園も明治42年には廃園になった。その後昭和に至るまで、埼玉県の幼稚園教育のほとんどは、私立幼稚園にゆだねられてきた。

明治期における埼玉県幼稚園の設置状況を分布図にして示すと次のようになる。

明治期における埼玉県幼稚園設立分布図

(第2図)



第2図は、以下のようなことを示している。

- ① 明治期に創設された埼玉県幼稚園の分布は、大きく分けると県の南部と北部に分れる。南部の場合は、首都東京に近く、その文化的影響を受けやすいためと考えられる。北部の場合は、その地方の有識者の教育に対する熱意の旺盛さによるものと考えられる。
- ② 早期に幼稚園が設置されたところは、全国的にみて人口も多く、経済的にもゆたかな町である。埼玉県の場合も同じ傾向が見られる。設立時期には多少のずれがあるが、浦和、熊谷、川越には複数の幼稚園が設置されている。

浦和、熊谷は、明治期以前は仲仙道の宿場町として栄えた。浦和は明治期に入って、県庁所在地となり、人口10,000人を有するようになり、熊谷は交通の要所として、人口18,000人を有していた。

当時、県内の交通の要所としては、熊谷のほかに川越をあげることができる。この町は、かつての城下町であり、織物、穀類の集散地として栄えていた。人口20,000人を有し、当時は県下第一の都会であった。

要するに埼玉県の場合人口も比較的多く、経済的にもゆたかな町に、早期から複数園が設置されていたといえよう。

次に各地の幼稚園の設立状況について述べる。

## II 師範幼稚保育科について

### 1. 設立の状況

当時我国は明治維新政府の手によって、学校制度が確立し、有産階級の親たちは子弟の教育に特に熱心であった。

したがって、機会があれば学令前の子どもを小学校に通学させようとする風潮があった。文部省としては、こうした風潮に対して、第12年報において、次のような見解を示している。

抑々学令未満ノ幼児ヲ学校ニ入ル事ハ之ヲ無益ノ遊戯中ニ措クヨリハ固ヨリ優ル所アルト雖ドモ其資質ノ脆弱ナルヲ以テ学令児ト共ニ同一ノ教則ニ由ラシムルトキハ徒ニ天賦ノ良質ヲ毀損シ身心ノ發育ヲ妨ケ其害尠カラズ

要するに、学令に達していない幼児が小学校に入学することは、ただあそばせておくよりよいが、学令に達した子どもと一緒に、同じ教育課程で教育することは、身心の発達を妨げることであり、問題であるとし、学令期の幼児は、当然幼稚園において保育されるべきであるとしている。そのための具体的な方策としては、すでに明治15年に文部省が各県学務課及び小学校長に対して出していた簡易幼稚園の方法(小学校の一部等を利用して、幼児を保育する場所を用意する)を昭和17年文部省通達によって勧めた。(幼稚園教育に関する通達第3号 文部省)

これを受けて埼玉県では、同年11月に、県立師範学校付属小学校に幼稚保育科を設置することにした。

このことは埼玉県年報(明治17年)において次のように述べている。



本年中新ニ計画セシ所ハ本校内ニ幼稚科ヲ設ケ学令未滿ノ幼児ヲ幼稚園ノ方法ニ因リ保育セシ是ナリ是文部省第三号達ニ伝ヒ兼ネテ管下小学校ノ模範ニ供セシ者ナリト雖向來之ヲ拡張シテ幼稚園ヲ起サントス。

学令未滿ノ幼児ヲ学校ニ入レ学令児童ニ同一ナル学科ヲ履マシムルハ營ニ身体ノ發育ヲ妨クルノミナラス精神ヲ害スルコト尠カラサルヲ以テ学令未滿ノ幼児ハ幼稚園ノ方法ニ因リ保育スヘキ旨示達サレタレトモ、退テ小学校ヲ觀ルトキハ概ネ教場狹隘ニシテ学令児童ヲ容ルニ苦シムノミナラス之ヲ教養スル教員モ亦隨テ不充分ナレハ学令未滿ノ幼児ノ教場ヲ別ニシテ之ヲ保育スル余地ナキカ如ク幼稚園ノ方法ニ因リ幼児ヲ保育スル者殆ト稀ナリ、唯之ヲ檢束シ以テ学科ヲ授ケサルノミ故ニ、其方法ニ至テモ未タ確タル者ナシ然レトモ今ニシテ之カ設備ヲ為ササレハ幼児ハ危險卑猥ノ遊戲中ニ成長シテ天賦ノ良性ヲ害フニ至ルヘキヲ以テ之カ計画ヲ為スハ目下ノ急務ト謂ハサルヲ得ス、故ニ本県ニ於テハ先ツ師範附属小学校ニ幼稚科ナル者ヲ設ケ修身及ヒ庶物ノ談話、読方、数へ方、書き方、画キ方、木ノ積立、板排へ、箸排へ、珠ツナキ、紙折り、紙摺ミ、紙折り、遊嬉等ニ因リ幼児ヲ保育セリ、将ニ漸ヲ以テ一般ニ及ホサントス

こうして県は、師範学校附属小学校内に幼稚保育科を設置し、学令に達しない幼児に対して、幼稚園で行う方法によって、保育しようとした当時の埼玉県は、経済状態から見て、義務教育である小学校の施設・設備も十分でなく、教員の確保もままならない状態であったが、将来のある子どもたちを悪い環境に放置しておけない。保育する場を作ることが急務であるとして、まづ師範学校に幼児を保育する場を作ったわけである。

師範幼稚保育科に対する内外の評価は高く付属小学校長から次のような報告が出されている。（文部省年報13号 明治18年）

17年中本校内ニ仮設セシ、幼稚科ノ保育ハ著シキ好結果ヲ見ハセリ、則チ本年中本科ヨリ、小学校科ニ入リシ者僅ニ5、6人ニ過ギサレドモ之ヲ其保育ヲ受ケザル者ニ比スレハ其知能発達甚タ速ニシテ之ト同一ノ教科ヲ履マシムルニ授業上ノ困難ヲ見ルニ至リシヲ以テ将来本科ヲ拡張シ附属小学校ハ之ヲ他ニ募ラスシテ本科ノ幼児ヲ転入セシメントス故ニ小学生ノ学力ハ自ラ其度ヲ高ムルニ至ルヘキナリ、目下保育ヲ受ケル幼児ハ40余名ニ過キサレドモ入科ヲ請フ者漸ク増加スレハ之ヲ拡張スルニハ甚タ容易ナルヘシ

このことから幼稚科の保育は、付属小学校にもよい評価を得ていたことがわかる。

幼稚保育科に入って保育を受けたものと、受けなかったものと比べてみると、保育を受けた子どもの方が知能発達がよい。したがって将来は、幼稚保育科で保育を受けた子どもを小学校に入りたい。その結果小学生の学力の程度は高くなるにちがいないとみた。

そこで幼稚保育科では、明治19年度になって、30名増募にふみきった。しかも同じ年に幼稚保育科内に保育伝習科をおき、保母養成を始めた。

## 2. 内 容

師範学校附属小学校幼稚保育科の仮教則によると、はじめのうちは、幼児数も24名、年令は4年6ヶ月～6年未滿であった。

創設2年後の明治19年になって幼児数もふえ、園則も正規のものになった。

### 県立師範学校附属小学校幼稚保育科規則

#### 第1章 通 則

第1条 本科ハ尋倫道德ヲ基トシテ幼児ヲ保育シ、家庭教育ヲ補ヒ、学校ノ教育ヲ資ケ兼テ県内ノ小学校ニ幼児保育ノ模範ヲ示ス所トス

第2条 幼稚ハ男女トモ其年令4年以上6年未滿トス

第3条 幼稚ハ年令又ハ身心発達ノ有様ヲ察シテ二組ニ分ツ

#### 第2章 保 育

第4条 保育ノ科ハ会集修身ノ話庶物ノ話木ノ積立板排へ箸挑へ豆細工殊繫キ紙織リ紙摺ミ縫取り紙剪リ画キ方数へ方読ミ方書キ方唱歌遊嬉トス

第5条 保育ノ時間ハ修身ノ話庶物ノ話唱歌遊嬉ヲ20分トシ他ノ課ヲ30分トス

第6条 毎日保育ノ時間ハ3時30分トシ土曜日ヲ2時30分トス

第7条 保育ノ場所ハ開講室及庭園トス

第8条 保育ノ課程左ノ如シ

保 育 課 程 表 (第3図)  
(表中ノ数字ハ毎週保育ノ度数ヲ示ス)

課 目	1 の 組	2 の 組
① 会 集	6	6
② 修身ノ話	3	3
③ 庶物ノ話	3	3
④ 木ノ積立	4	3
⑤ 板排へ	2	1
⑥ 箸排へ	1	1
⑦ 豆細工	1	1

⑧ 珠繋キ	1	0
⑨ 紙織り	1	1
⑩ 紙摺ミ	2	1
⑪ 縫取り	0	2
⑫ 紙剪り	1	1
⑬ 画キ方	2	3
⑭ 数へ方	1	2
⑮ 読ミ方	3	4
⑯ 書キ方	2	2
⑰ 唱 歌	6	6
⑱ 遊 嬉	6	6
通 計	46	46

### 第3章 入学退学

第9条 入学ハ1年1次又ハ2次トス其期限ハ予メ広告スヘシ、但欠員タルトキハ臨時入学ヲ許スコトアルヘシ

第10条 入学ヲ願フ者ハ第1号書式ニ依リ入学願書ヲ出スヘシ（書式省略）

第11条 幼児ノ学令ニ達シ或ハ疾病事故アリ退学セシト欲スル者ハ其旨父兄ヨリ申出ヘシ

第12条 6ヶ月以上實際ニ保育ヲ受ケタル者ニハ第二号書式ニ依リ保育証書ヲ与フヘシ（書式省略）

幼稚保育科の園則を参考にして、当時の人々の幼稚園教育に対する期待を考察すると、第1が家庭教育の補いであり、第2は小学校教育を助けるものとしての教育であることがわかる。

#### ① 会 集

全園児を遊戯室等に集めて、話をきかせたり、唱歌を歌わせたりする。

#### ② 修身の話

道徳に関する話を具体的に、やさしく話してきかせる。

#### ③ 庶物ノ話

日用の家具、什器のこと、獣鳥類、草木等子どもが親しみやすいものを具体的に示したり、標本、絵図等を示すことによって、子どもの観察力や語いを教える。

#### ④ 木ノ積立テ

立方体、長方体、方柱体等の木片を与えて門、家、橋等を作らせる。

#### ⑤ 板排へ

これは正方形、三角形、小板等を子どもに与えて、門家、橋等を作らせる。

#### ⑥ 箸排へ

長短さまざまな箸を与え、門、家、机等の輪廓を作る。

#### ⑦ 豆細工

水に浸した豆をひごでつなぎ机等の形を作る。

#### ⑧ 珠繋キ

これは短く切断した麦藁の切れと、孔の空いた色紙の切れを用意して、これらを糸でつないだりする。

#### ⑨ 紙織り

細く切った色紙をたてよこといろいろな模様を編み、配色の工夫をさせる。

#### ⑩ 紙摺ミ

色紙によって、舟や鶴等の形を折って想像力を養う。

#### ⑪ 縫取り

花、草等の形を糸で縫取りして、針の使い方を知らせる。

#### ⑫ 紙剪り

色紙を与えて方形、三角形等に切って、それを白紙の台紙に貼りつけて、種々の形を造って、種々の紋形等を切りぬいて創造力や、はさみの使い方を教える。

#### ⑬ 画キ方

始めは野のある石盤の上に縦線・横線・針線を使って物の略形を描かせ、やがて鉛筆で野をひいた紙を描かせる。

#### ⑭ 数へ方

果物、小石、貝殻其他の実物を使って、数を教え、数の観念をどうやら取得したものは、30個以下の寄せ方や、引き方をやり、10以下の数字を教える。

#### ⑮ 読ミ方

最初は片仮名で、幼児の知っているものの名称の綴り方を教え、その後は仮名を書いた骨牌で、物の名を綴らせる。

#### ⑯ 書キ方

片仮名、平仮名を使って、物の名を黒板に書き、石盤の上に練習させ、数も書かせる。

#### ⑰ 唱 歌

保母の歌うのに模倣して、簡単で、興味のある唱歌を歌わせ、時には楽器を使って歌わせ、胸を開いて健康を補い、心を和げる。

#### ⑱ 遊 戯

幼児に適するものを選んで、これをさせ、身体を丈夫にして、精神を爽かにさせることを要求する。

幼稚保育科の保育課程は、わが国でもっとも早く創設された東京女子師範学校付属幼稚園の保育課程に準ずるものであった。

### 3. 廃 園

幼稚保育科が廃止されたのは、明治26年3月のことで

ある。このことについて、師範学校長から知事あてに次のような申し出がなされている。

本校付属小学校中幼稚科ノ設置有之候処右ハ明治  
20年12月文部省令、第26号尋常師範学校付属小学校  
規程中ニ無之加フルニ来26年度本校経済上ノ都合モ  
有之候間本年度限り相廃止度此段内申仕候也

明治26年3月21日

尋常師範学校長 矢部善藏

埼玉県知事 銀村 綱男殿

上記の文書によると、廃止の申し出は、師範学校長より出されたことがわかる。

明治17年、文部省が学令前の子どもは幼稚園で教育されるべきであるという通達の主旨に即して、県が早速開設したものであったが、文部省の付属小学校規定の改定と、経済的理由によって、もろくも廃園のうき目であったといえよう。

### Ⅲ 町村立幼稚園について

#### 1. 設立の状況

学令前の幼児と、学令に達している幼児と一緒に教育するのは問題がある。学令前の幼児は幼稚園の方法で保育すべきであるという文部省第3号通達を受けて、県では、早速師範学校に幼稚保育科を設け、やがては各地の小学校にも幼児を保育する場をふやすことを奨励した。

そうした県の意向と、師範幼稚保育科の評判を伝えきいた有識者たちは埼玉教育雑誌等に幼稚園教育の意義について文をのせた。（埼玉教育雑誌第67号、明21年12月号）これらの影響を受けて、明治22年には熊谷、浦和、本庄、所沢の4ヶ所の尋常小学校に付属幼稚園が相ついで設置された。

#### 2. 内 容

園児数は、明治27年を例にとると、熊谷小学校付属幼稚園、浦和小学校付属幼稚園、本庄小学校付属幼稚園の三園の園児数を合せ159名になっている。（文部年報による）また10年後の明治39年においては、公立では熊谷小学校附属幼稚園に42名、私立では初雁幼稚園、川越幼稚園の両園合せて128名の園児数になっている。

入園児の家庭階層については今後にむけて研究していきたいと考える。

保育年限は、熊谷、浦和小学校付属幼稚園とも、学令まで2ヶ年を保育年限としていた。（文部省年報による）但し熊谷小学校付属幼稚園の場合は明治34年から保育期間6ヶ月となり、明治41年廃園になるまで続いている。

保育課目は、浦和小学校付属幼稚園の場合は、師範幼稚保育科のものをそのまま採用しているが、熊谷小学校

付属幼稚園、本庄小学校付属幼稚園の場合は、師範幼稚保育科の保育課目を参考にしているが、「教え方、読み方、書き方」という課目が除かれ、その他として、行儀（言語、整頓、動作、清潔等）が加えられている。

明治期の町村立幼稚園の設置についての確認は、県保管の行政文書によるものであるが、熊谷小付属幼稚園をのぞいて付属幼稚園が設置されていたと考えられる町村役場や、小学校ではその記録を見つけることができない。したがって各園の保育内容については、詳しく知ることができなかった。

県庁に残されている浦和小学校長の知事質問に対する回答（知事巡視功程）は、当時の人々の幼稚園教育に対する考え方が表現されていて興味深い。

「父母ノ感情、文字ヲ覚エシムルコトノミニ注意シテ、保育ノ如何ヲ心得ザルモノ多キガ如シ故ニ僅カ一年位ノ保育ヲ受ケテ尋常科ニ入ラシメント望ムモノ多シ」となっている。

要するに父兄は、子どもが文字を覚えることばかりに関心をもって、保育とは何かを考えない、そのため保育年限は、2ヶ年となっているのに1年だけに園させて、小学校に送り込むことを希望するというのである。

人々の幼稚園教育に対する期待は、昔も今もかわっていないといえる。

#### 3. 廃 園

熊谷、本庄小学校付属幼稚園のように、師範幼稚保育科と異った保育課目までを生み、埼玉県の幼稚園教育の試金石になった町村立幼稚園もあったが、明治26年の師範学校付属幼稚保育科の廃園に引きつづいて、明治28年には、本庄小学校付属幼稚園がまづ廃園し、明治30年になると、浦和小学校付属幼稚園の廃園をみる。

明治期に開設され、県内の幼稚園教育の礎を作った公立幼稚園のうち、もっとも長期に亘って存続したのは、熊谷小学校付属幼稚園であった。

埼玉教育雑誌、県行政文書（明3361）等によれば、明治22年から明治42年の20年間存続していたことになる。

所沢小学校付属幼稚園の存続は2、3年であり、本庄小学校付属幼稚園の存続は7年、浦和小学校付属幼稚園の存続は9年間であった。熊谷小学校付属幼稚園の場合も20年間には廃園の危機が何度か訪れたにちがいないが、他の公立幼稚園に比較してもっとも長期にわたって存続したのは、明治34年から保育年限を6ヶ月に短縮したことにあると考えられる。

廃園届は明治42年3月4日、熊谷町長から、知事あてに提出されている。（県行政文書明3361号）

廃園の理由は、義務教育が従来の4年から6年に延長された結果、教室が手詰まになったためとされている。

熊谷尋常小学校付属幼稚園廃止  
許可稟請書

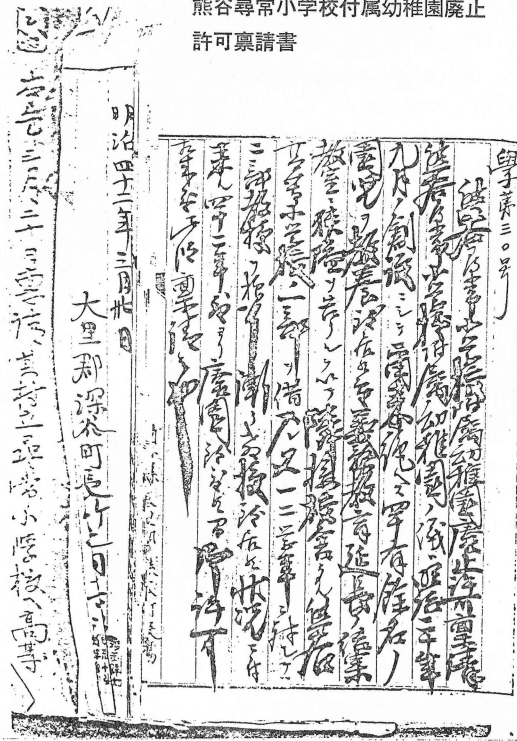


写真 2

(写真 2 参照)

#### IV 私立幼稚園について

県下の公立幼稚園は、明治末期になると、ことごとく姿を消している。しかし一方では、各地に私立幼稚園の創設を見るようになった。

県に提出された許可申請書によって許可された私立幼稚園を表示すると、第 3 表のようになる。

##### 1. 設立の状況

##### a 初雁幼稚園（宇気良幼稚園）

この幼稚園は、牧師である田井正一氏の手によって、明治34年に、川越町に創設された。

創設当初の名を宇気良幼稚園と称した。設立の翌年園舎を初雁に移転させ、その地名をとって初雁幼稚園と改名した。

創設者の田井正一氏は、嘉永元年に松本藩士の三男に生れる、「国賊耶蘇に一泡吹かせずんば」と教会の門をたたき、結果的には、聖公会ウィリアム主教の感化を受けてキリスト教に入信し、神学校を卒業し、日本人最初の執事按手を受けた。

明治41年になって、園の経営がミッションの手に移ると園長を米国から布教にやってきたヘーウッド女史に譲った。ヘーウッド女史もまもなく立教女学院の校長として東京に移ってしまい、その後を受けて園長になったのが、その年の3月伝道のため来日したアプタン女史である。

初雁幼稚園は女史の手によって、現在地に園舎を建設している。アプタン女史はその後、浦和、大宮、熊谷、東松山の各地に教会を作ると共に幼稚園を創設した。

##### b 川越幼稚園

この幼稚園は、元小学校長榎本中三郎氏によって、明治36年に創設された。

榎本中三郎氏は、平田篤胤の門下であった榎本太輔氏の三男として、明治2年に埼玉県与野市に生れる。明治18年浦和中から、師範二部を卒業、小学校の教員となる、後年川越仙波小学校に赴任した。当時の川越は、織物と米の集積地であり、親達は忙しく、幼い子どもたちが小学生の子守りにまかせられているのを見て、自宅を開放し、幼い子どもたちの教育を志す。氏の幼児教育に対する関心は、父親太輔氏ゆづりであ

埼玉県における明治期の私立幼稚園一覧表

(第 3 表)

	幼稚園名	設 置 者		設 立 年 次	保 育 年 限	保母数	行 政 文書番号
		氏 名	職 業				
1	宇気良（初雁）幼稚園 （川越市）	田井 正一	牧 師	明治34年	満3才より 就学時まで	30名につ き1名	明3285
2	川 越 幼 稚 園 （川越市）	榎本中三郎	元小学校教師	明治36年	満3才より 3ヶ年	〃	明3500
3	熊 谷 幼 稚 園 （熊谷市）	アプタン	牧 師	明治42年	満3才より 就学時まで	〃	明3360
4	幸 手 幼 稚 園 （幸手町）	青木 翁助	元小学校教師	明治44年	満3才より 就学時まで	30名につ き2名	明3372

り、銀行家を父に持つ夫人きいの援助もあって、900坪の庭内を子どもたちと小動物の生活の場に提供した。

明治33年に小学校を辞すると、幼児教育に専心し、明治36年には県の認可を得て、川越幼稚園とした。

#### c 熊谷幼稚園

熊谷小学校付属幼稚園が廃園届を出したのが、明治42年であるが、それと前後して同地に牧師（アプタン女史）の手によって開園した。

開園当初から30名前後の園児を集めた。熊谷の場合、たまたま公立幼稚園の廃止年度と、私立幼稚園の開園年度が一致している。これは偶然の一致と思われるが、私立熊谷幼稚園の発展には、タイミングがよかったといえよう。

創設者エリザベス・アプタン女史は、それ以前に川越で、初雁幼稚園の経営経験をもっている。

アメリカ人であるが、幼少時から父親に日本の話を聞き、ベルリン大学で神学を学んだ後、一旦帰米したが、早速日本伝道を志して、大学時代の先輩であるヘイウッド女史を頼って来日した。ヘイウッド女史の後を受けて、初雁幼稚園の園長になるが、まもなく園長職をランソン女史にゆずると、自ら熊谷に伝道、新しく聖公会の教会を作り、そこに熊谷幼稚園を創設した。

その後アプタン女史は、伝道のため居を浦和に移し、明治44年教会設立と同時に、借家を借りて、浦和にも新しい幼稚園を設立した。

#### d 幸手幼稚園

幸手幼稚園の設立が許可されたのは、明治も終ろうとする明治44年のことである。創始者青木翁助氏は、地元幸手小学校に勤務していたが、校長と意見の食い違いを生じ退職した。青木氏は在職中から、幼児教育の必要性を感じていたので、退職すると早速夫人の手を借りて、学令前の子どものための私塾を開いた。

青木氏の幼児教育に対する熱意に動かされた地元有力者は、園舎建設に力を貸した。

青木氏は、大正5年に幸手町誌を出版した後上辰雄氏に、当時の状況を次の様に語っている。

「当時において、毎年新たに小学校に就学義務を生ずるもの120名前後、入学前における家庭教育の状況をみると、生活程度の階級の如何にかかわらず、善悪いづれにも、最も感染し易い大切な幼児期の保育教導がほとんど、なおざりになっている。実に心配に耐えない。

しかし一方家庭を見ると、日々の生活多忙をきわめ

るとか、子沢山にて、手がまわりかねるとか、種々の障害によって、そのひまがなく、幼児の愛を受け入れる親も少ない、これを観察すると、誠に前途憂慮に耐えない。」

学令前の幼児たちの教育がなおざりになっていることを心配して幼稚園設立を思い立ったものと思われる。

## 2. 内容

埼玉県の私立幼稚園として、もっとも早期に設立された宇気良幼稚園（後の初雁幼稚園）は、県当局に保育内容を次のように届けている。（県行政文書明3285号）

### 宇気良幼稚園保育課目細目

課目ノ細別ヲ左ノ如クシ、容易単純ナルモノヨリ順次稍複雑ナルモノニ進ム。

1. 遊戯 分チテ随意共同ノ二種トシ、一ハ幼児各自ノ随意ニ運動セシメ、一ハ歌曲ニ合シテ諸種ノ連合運動ヲ為サシム。

目的 心情ヲ快活ニシ身体ヲ健全ナラシメンコトヲ期スヘシ。

1. 唱歌 保育ノ目的ニ副フヘキ興味アル平易ノ歌曲ヲ選択シテ唱ハシム。

目的 聴器発声器及呼吸器ヲ練習シテ其発音ヲ助ケ心情ヲ快活純美ナラシメ兼テ徳性ヲ涵養センコトヲ期スヘシ。

1. 談話 有益ニシテ興味アル事実及寓言、天然物及加工品等ノ説明、思物絵画ノ説明等トス。

目的 徳性ヲ涵養シ観察注意ノ力ヲ養ヒ、兼テ發育ヲ正シクシテ言語ヲ練習セシメンコトヲ期スヘシ

1. 手技 幼稚向恩物ヲ使用シ、積木、板排、箸排、豆細工、砂遊、泥土細工、環排、鎖繫、摺紙、剪纸、折紙、縫取、画方、毬技、球転、貝挑等ヲ為サシム。

目的 手及目ヲ練習シ心意ノ發育ニ資センコトヲ期スヘシ。

### 1週間ニ於ケル保育時間ノ割合

但シ毎日30分即1週間2時間半ノ食事ノ時間ヲ除ク

遊戯 共同 3時（1日30分）

随意 11時（1日2時）

唱歌 3時（1日30分）

読話 3時（1日30分）

手技 5時半（1日1時間）

この内容は、明治32年に文部省令第32号「幼稚園保育

及設備規程」に従っている。即ち、遊戯、唱歌、談話、手技等保育4項目である。師範学校附属幼稚保育科の保育課目として組み入れられていた「書き方、読み方、数え方」等は見当たらない。このことは先述の熊谷、本庄の町村立幼稚園の場合と同様である。

したがって、「書き方、読み方、数え方」は当時の幼稚園の保育内容に必ず組み入れられていたわけではない。

もっともここで取り上げた保育内容は、幼稚園の園則に記されている保育内容であり、宇気良幼稚園（初雁幼稚園）の保育が日々どのように展開していたか実際的なことを知りたいと考えたが生存者皆無で果せなかった。

次に宇気良幼稚園について創設された、川越幼稚園の保育内容を当時の園則によって概観したい。

#### 川越幼稚園保育課目

1. 躰方 家庭ニ於テ行フベキ作法言葉遣ヨリ漸次学校管理ニ近キ規律的ノ作法ヲ演習セシム
2. 談話 極メテ平易ニシス興味アル修身的談話及遊戯的談話ヲナス修身的談話ハ精神ノ感應ヲ主トシ遊戯的談話ハ幼稚ノ話方ヲ主トス
3. 唱歌 簡易ナル遊戯的唱歌徳育的唱歌
4. 遊戯 幼稚ノ自由ニ任セ務メテ快活ナラシコトヲ要スト雖モ時々唱歌的遊戯競争的遊戯等ヲ加ヘ且ツ近郊ニ伴ヒテ野外運動ヲナサシム
5. 観察 園内ノ天然物及人工物等ヲ観察セシメ成ルヘク幼稚ノ質問ヲ待チテ懇切ニ説キ明カシ幼稚自身ノ氣象ヲ養成シ好學心ヲ起サシムルコトヲ目的トス、故ニ本園ニ於テハ多数ノ動植物及鉦物器具等ヲ備附ス。
6. 練習 専ラ五官ノ作用ヲ正確ナラシメング為メ、実物図画等ヲ示シ、其名称ヲ唱ヘシメテ言語ノ練習ヲナシ、積木並板折物絵画等ヲ以テ、手及目等ノ練習ヲナサシム（県行政文書、明3300号）

川越幼稚園の保育課目も橋本氏が、県の認可を受けるため整えた資料であり、長女（園子）の話によると実際の保育は、東京女子高等師範附属幼稚園で学んだ実物中心の保育内容がそのまま取り入れられていたという、榎本氏は幼児期の行き届いた教育こそ、その1人ひとりを生かすために重要であり、子どもの「可愛さ」は、大人に行き届いた配慮させるために存在するのだと述べていた。

#### V まとめ

埼玉県における幼稚園の創設のきっかけの1つとなったものに、学令前の子どもを小学校に入れることを禁止した文部省通達がある。それは「学令前の子どもを就学

させてはいけない。幼児は小学校の一部を使っても幼稚園の方法で保育すべきである」とするものである。明治17年のことである。この年日本全国の幼稚園は、官立1、府県立2、町村立7、私立7の17園のみであった。それでも前年の11園に比較すると、1年間に6園も増設されたことになる。

埼玉県では、明治17年の師範幼稚保育科の創設を皮きりに、明治22年には、熊谷、浦和、本庄、所沢の4ヶ所の町村立尋常小学校に附属幼稚園が設立されている。

したがって本県の場合も、他県同様に明治期は幼稚園教育の創設期ということができる。

しかし本県の場合は、折角設立した公立幼稚園を後になって次々に廃園にさせている。

最初に設立された師範幼稚保育科は文部省通達を受けて、県の要望によってはじめられたものである。したがって、国の法改正（師範学校附属幼稚園の規定がなくなる）によって簡単に廃園となる。

師範幼稚保育科の設立に刺激を受けて、明治期に各地に創設された町村立小学校附属幼稚園も、次々と廃園のうき目にあっている。

熊谷小学校附属幼稚園の場合、後半就園年限を6ヶ月に短縮して明治42年3月まで、約20年の長きに亘って存続しているが、当時の公立幼稚園としては、むしろ画期的といえる。

経済的な側面から、県内事情を考えてみると、当時埼玉県には顕著な産業がなかったため財政的にゆたかでなく、義務教育をささえることも容易でない状況であった。

したがって義務教育以外の教育に対する配慮は、二の次にせざるをえなかったと考えられる。

こうした県内の事情が、その後の本県の幼稚園教育の発展に私学中心という1つの方向性を与えたともいえる。

保育内容については、最初に設立された師範幼稚保育科の場合は、幼稚園教育では先輩格の東京女子師範附属幼稚園のものをそのまま受け入れているが、その後各地に設立された町村立小学校附属幼稚園では、師範保育科の保育内容を参考にしながらも「読み方、書き方、数え方」という課目が除かれ、その代りに行儀（言語、整頓、動作、清掃等）が加えられている。

私立幼稚園の場合は、県の認可を受けるさい、明治32年に制定された「幼稚園保育及設備規程にそくして保育科目が届けられているので、文書上の内容については大差がないが、実際の保育は、創始者の幼児教育に対する考え方によって趣を異にしたと考えられる。

## 参 考 文 献

- 埼玉県教育史，3巻，4巻，5巻  
（埼玉県教育委員会，昭和47年3月1日発行）
- 幼稚園教育百年史（文部省，昭和50年8月30日発行）
- 日本幼児保育史，第1巻，第2巻，フレーベル館  
（日本保育学会，昭和43年6月30日発行）
- 幼稚園の歴史（津守真，久保いと，本田和子共著）  
原生館，昭和34年11月25日発行
- 埼玉県誌下巻（埼玉県大正元年11月13日発行）
- 埼玉県年報（明治17年～44年）
- 熊谷，浦和，川越史誌
- 埼玉大学教育学部百年史
- 埼玉大学教育学部付属小学校史
- 川越幼稚園起源小史
- 日本保育学会年報（郷土にみられる保育の歩み）  
埼玉の保育を進めた人々，立川多恵子